

特集 ヘアアジアのお正月

インドのお正月

宮地 敏子

Iさん、カードありがとうございました。ヒンドゥー教徒が八割を越すインドでも、ここ首都ニューデリーでは、サンタクロースやクリスマスツリーが市場には並びます。

今年はこちらで年を越そうと思っています。インドは暑いところというイメージでしょうか？ でも、今部屋には暖房が入っています。一、二ヶ月という

短い期間ですが五度くらいに下がるので、オーバーが必要なくらいです。北はヒマラヤ、南は赤道に近いのですから気候もいろいろです。

ところで、「今年はインドのお正月をお過ごしですか」というIさんの言葉に、はたと考え込んでしまいました。「インドのお正月」。インドって「お正月」ってあったつけ、というわけです。元日も銀行

はやっていますし、年末にも日本のような師走のあ
わただしさはありません。

インドの友人に聞いてみました。日本に住んだこ
とのある人は言いました。「インドには日本のよう
な正月はありませんよ」。他の数人の答えは同じで
した。「新年はいろいろあるし、祝い方もいろいろ
です」。新年は一月一日全国一斉の日本とは違うの
です。ヒンドゥー教にはヒンドゥーの暦、イスラム
にはイスラムの暦があり、それぞれ新年を迎える日
が異なります。

それでは「日本のような正月」とはどういう意味
でしょうか。彼女は流暢な日本語で言いました。

「衣食住すべてに、特別なものを用意しますよね。
着るものは伝統的な着物、食べ物はおせち料理とお
雑煮、鏡餅やお屠蘇。玄関には門松。遊びも歌留
多、双六、独楽、羽根突きなど。初めてのお正月で
覚えているのは、友達の家が私のために伝統的な

日本の正月を経験させてくれたこと。寒かったこ
と。町が静かだったこと。神社が込んでいたこと。
テレビもいつもと違っていたこと」。彼女はとても
印象に残っていたのでしょう。そして言いました。
「みんなが同じように、新しい年を祝うというのは
インドでは考えられない」と。

「新年がいろいろ」という説明は、私には新鮮でも
ありまた不思議でした。「地方により、宗教により
新年はいくつもある」というのです。ヒンドゥー教
の新年は、暦が太陽暦と太陰暦を組み合わせたもの
で一定ではないのですが、ヴァイシャークの月の初
め、たいてい四月です。イスラムの新年ムハッラム
も四月ですが、同じ日ではありません。ゾロアス
ター教の新年は三月です。これは宗教によって新年
の日付が異なる例ですが、祝い方はさらに多様で、
地方によってもいろいろだそうです。

困惑した顔に見えたのでしょうか、「インドでは

ね、『十二ヶ月に十三の祝い事』って言うくらい行事が多いんです」と一人が言うと、「私は『一年三六五日に、五百の祭』と聞いていますよ」と別な人が付け加えました。

国中が一斉に祝日としているのは三日だけです。

これは西暦で固定しています。一月二十六日の共和国記念日、八月十五日の独立記念日、十月二日のマハトマ・ガンディー生誕日です。後の祝祭日は宗教また地方によりさまざまなのです。

「Iさん、我が家には数人ハウススタッフがいますが、彼等にも聞いてみました。「新年にはどんなことをするの」。キリスト教徒の給仕は教会に行ってお祈りをしてパーティーをするそうです。元日は出勤日だし普段どおりだというコックは敬虔なヒンドゥー教徒です。」

では、服を新しくしたり、その日だけの特別な料理を食べることや、大掃除をすることはないので

しょうか。帳簿を新しくするのはいつなのでしよう。また、子どもたちが指折り数えて楽しみに待つような祝日はいつなのでしょう。

熱の入れ方は地域で異なるようですが、ここデリーでは「ホーリー」と特に「デイワリ」が盛んです。ヒンドゥー暦バルガム、西暦では二月から三月にかけての満月の日に人々は「ホーリー」を祝います。冬の終り、春の訪れを喜び合い、豊穰を祈ります。この日の前夜、火を焚くのはヴィシユヌ神に帰依していたブララド王子が父王の姦計で焼き殺されそうになったのを信心の力で救われたという故事に基づきます。また色粉や色水を掛け合うのは、ヴィシユヌ神の化身であるクリシユナ神が乳搾りの乙女達に春の花を振りかけられて踊る話に由来します。昨年ヴァナレスに行ったのですがホーリーで色を掛け合った翌日、男の人たちが白い真新しいクルタパジャマを着ているのを眩しく目にしました。この日

ホーリー



は身分関係なく色水を掛け合っていることになっていて酔っ払いも多く警察も頼りにならず、女性は街にでない方が良くといわれるほどです。しかし子ども

もたちは色水の掛け合いを存分に楽しみます。子どもたちが一番楽しみにしているのは「光の祭」といわれる「デイワリ」でしょう。別名ディー

パワーワリ（『灯明の列』の意）はヒンドゥー暦カーティック、西暦では十月から十一月にかけての新月の日と決められています。月のない夜、家々には小さな素焼きの皿にランプやろうそくの火が灯されます。ヴィシヌ神の化身英雄ラーマ神がシータ妃と弟ラクシマンを連れ、十四年の追放から自国へ帰国したことを祝い、またヴィシヌ神の妻で富と幸運の女神

ラクシユミを迎える目でも
あります。デリーではラク
シユミと象の頭をもつガ
ネーシャ（シヴァ神の息
子、富、知恵、幸運、商売
繁盛の神）が対になったお
もちやのような飾り物が店
頭に溢れるように売られて
います。去年のものと交換
して新しい像を祭壇に飾る
そうです。喪中の家はこの
祭には参加しません。日本
も同じですね。それにデイ
ワリに向けて壁を塗り替え
たり、大掃除をしたりします。新しい服を用意し、
親戚や世話になった方々への贈り物を準備します。
プレゼントには菓子、ドライフルーツ、ナッツ、銀



ディワリ

製品や装飾品など、さまざまです。当日は神棚に供
え物をしプージャ（祈りの儀式）をします。ラク
シユミの像の前に米麦、豆、野菜、果物菓子などを

供え、線香を焚きます。お坊さんか家長がお経（マントラ）を唱え、その間家族は手を合わせています。水や花もささげ、額に赤いティカをつけてもらい儀式終了。その後は供え物を下げてみんなで宴会をし、子どもたちは爆竹や花火をしたりして遊びます。

デイワリは前後五日間祝いますから、雰囲気としては日本の暮や正月と似ているかもしれませんが。主として家族親戚で祝われるので、デイワリの日のホテルのレストランは閑散としています。しかし夜景には打ち上げ花火があちこちで光りきれいです。その下では灯火の中で子どもたちが花火やクラッカーに興じているでしょう。想像するだけで温かな情景が目につかびます。

Iさん、宗教が日常生活で根強く生きています。インドに暮らしていると、四季の移ろいに影響されている日本の生活が優しく美しく軽やかに思われます。

人間の葛藤や欲望が露骨に時として醜悪にも神の姿で示されるインド。自然を人知を超えるものとしてあがめてきた日本。大いなるものを畏敬し『祈る』行為は同じであるのに、表現される形が随分異なります。たぶん来年が最後のデリー暮らしになります。Iさん、デイワリがお正月に似ているかどうか確かめに、是非遊びに来てください。お待ちしています。本年もよいお年でありますように。

（洗足学園短期大学・デリー大学）

☆イラストは、「MY BOOK OF INDIAN FESTIVALS」

（Written by Jamila Q. Varawala Designed and Illustrated by Jenny Bhart Tara Donnelley Limited）より転載しました。